

## ハイデルベルク信仰問答講解説教43「気前よく生きる」(2012年7月29日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて／虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え／さまよう貧しい人を家に招き入れ／裸の人に会えば衣を着せかけ／同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙のように射出で／あなたの傷は速やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し／主の栄光があなたのしんがりを守る。あなたが呼べば主は答え／あなたが叫べば／「わたしはここにいる」と言われる。軛を負わずこと、指をさすこと／呪いの言葉をはくことを／あなたの中から取り去るなら飢えている人に心を配り／苦しめられている人の願いを満たすなら／あなたの光は、闇の中に輝き出で／あなたを包む闇は、真昼ようになる。(イザヤ58：6-10)

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだけれど、パンを欲しがると自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがると、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(マタイ7：7-12)

## 【説教】

本日の説教に入る前に、この度の牧師の留守の間のことについて皆さんに改めて感謝とそして水害の被害に遭われた方々へのお見舞いを申し上げたいと思います。まずは、この留守の間、二回の日曜日を含みましたが、滞りなく礼拝が守られたこと、そのために長老はじめ、教会員の方々が教会をしっかりと守ってこられたことを心から感謝いたします。長老会もこのために備えをしまいましたが、教会員の皆さんも祈りをもって努めて礼拝に集われました。礼拝の責任を担うことは非常に重い事柄ですが、本当によくこの務めを果たされました。これにより長老会、教会員の意識は高まり、一層成長したのではないかと思います。

そして、この度の水害のことでありますが、お亡くなりになられた方々、被害に遭われた方々に心からお見舞い申し上げます。当時わたくしはすでに日本を離れ、その第一報は最初の訪問地マルタにいた時でありました。マルタの現地でもニュースで報道されていたから、世界的にこの熊本の水害のニュースが流れたらと思う。阿蘇の内牧、一宮の被害のことを聞き、避難されている教会員のこと、温泉病院の被害、伊藤さんの製材所のこと。妻からの連絡に心は張り裂けそうになる思いで日々を過ごしました。幸い、熊本地区の社会部が連絡を取り合い、特に温泉病院の復興のためにボランティアが入り、迅速に作業がなされました。実は昨日、温泉病院と伊藤さんの製材所を訪ねたのですが、温泉病院の方々は教会からのボランティアのことを大変感謝しておりました。また教会員の皆さんも個人的に連絡を取り合って、また避難解除もなされていない状況で訪問されるなど、この非常時に献身的に行動されたと思います。今回のことからよく学んで、わたしたちがこのような時にどう対応すべきなのか考えてまいりたいと思います。また温泉病院も伊藤さんの製材所もまだまだ大変な状況が続きます。引き続きわたしたちが出来ることを行っていく必要があるかと思えます。

今回の旅は全行程17日間という長いものでありましたが、パウロの足跡を辿り、最後にパウロがローマに入り、殉教していく道筋を辿っていく旅でした。1982年からエジプトから始まり、イスラエル、ヨルダン、トルコ、ギリシャ等、聖書の世界を実に30年をかけて旅をするその最後の旅で、それにわたしが同行できたことは本当に感謝でありました。伝道者としてのパウロの歩みと自分とを重ね合わせながら、その姿勢から学び、自分自身を省みるよい機会となりました。ある参加した牧師が、「このような旅行は隠退してからでは意味がない。現職の内に行くから意味がある。それはこの旅を自分の神学的思索や、日々の牧会に生かすことができるからだ」と言われました。

そしてそれゆえに現職の牧師を送り出してくださった教会に感謝しなければならぬと言われました。本当にその通りだと思います。改めて皆さんに感謝申し上げますと共に、これからの牧会にもこの経験を十分に生かしていきたいと思えます。近いうちに報告会等が持てればと思います。

さて、本日の説教に入りますが、今日は、ハイデルベルク信仰問答の講解に再び戻ります。問110-111までのところですが、ここは十戒の第八戒「盗んではならない」についての問答となります。ここも例えば第六戒の「殺してはならない」のように殺人という罪はごく稀で大方の人間はこの戒めを他人事と考えている。ですからこの第八戒も盗みを働かなければそれでよいというような考え方になりやすいところです。強盗は刑事処罰の対象になります。

以前、説教の中でも触れましたが、アウグスティヌスの『告白』の中にアウグスティヌスが若い頃に窃盗をしたことが記されています。実はわたくしも小学1、2年の頃でしたが、近くの駄菓子屋さんと友だちとお菓子を盗んだことがあります。ドキドキしても二度としないという気持ちだけが残りました。今でもその時のことを覚えています。一緒に盗んだ友だち吉田君のことも覚えています。

盗みはもちろん悪いことであって、してはならないことは世間の常識ですが、しかし信仰問答はもう少し、この盗みということ掘り下げてわたしたちに教えています。まず問110に注目しましょう。「自分の隣人の財産を自らのものにしてしまうあらゆる邪悪な行為また企て」とあります。そういうことを「合法的な見せかけによって」するということです。以前、紹介しましたドイツの改革派の牧師アルフレート・ラウハウスは、この問答のところで、「経済的搾取も不公平な貿易条件も、より貧しい人間や国々や民族を犠牲にして、自分たちの豊かさを増していくのは、広い意味で、この戒めの対象である」と述べています。安い商品がある背景にはそれだけ安い人件費で働く貧しい人々、貧しい国々がそこにあると考えなければなりません。そういう経済的不均衡さによって、貧しい国はますます貧しく、豊かな国がますます豊かになる。これはそういう力関係によって、隣人の財産に介入にしていこう。自分たちの利益のために不当に隣人の権利を侵害し、脅かすことなのであります。

実は、この第八戒は「盗み」ですが、これは物を盗むというよりは、「人を盗むこと」要するに誘拐の禁止と聖書学的には言われます。物を盗むことはむしろ第十戒「隣人の家を欲してはならない」そこにかかっている。この第八戒は「人を盗む」他人の権利を侵害し、それを脅かすことに対する禁止なのであります。

ます。わたしたちは知らず知らずのうちにそのようなことをしているのではないのでしょうか。

ここでは例えば「人権侵害」ということを思い起こしてもよいでしょう。人として生きる権利を脅かす、侵害する。世の中には様々な人権侵害があります。要するにハラスメントと呼ばれるものです。人の領域に土足で踏み込み、我が物とする。相手の弱さにつけ込み、自分が不当にこれを支配する。それはこの戒めに触れていることと理解してよいでしょう。

そういうことはしないとわたしたちは言いきれないでしょうか。何よりも人間の罪とは、神さまに対する権利の侵害と理解することができます。アダムとエバの墮罪は、人間が人間であることを捨て、神のようになることでありました。それは人間が神さまの領域に土足で入り込むことです。それは神さまの権利を侵害し盗むことなのです。この罪を持っている以上、わたしたちが隣人に対して同じようにその権利を脅かし、介入し、これを盗むということは当然起こって然りなのであります。それは身近な家族、友人との関わり、教会員同士の関わりの中でも、よかれと思ってしまうことが相手の触れて欲しくない部分に土足で踏み込むようなことになっている。そのことは気をつけなければなりません。そういう過ちはわたしたちの日常に多く存在いたします。

そして、もう一つここで「浪費」ということが言われていることも注目しなければなりません。信仰問答はこれも「盗み」の中に含むのです。特に豊かな生活に慣れきっている現代社会はこの浪費という問題をもう一度考えなければなりません。もちろん個人の生活のこともそうですが、例えば食料も有り余り浪費する国がある一方で、食料の足りない国もあります。資源の浪費もそうでしょう。震災以後は、エネルギーの問題も随分意識が高まってきました。もう使いたいだけ電気を使う時代ではなくなりました。地球の資源にも限りがあります。もはや原子力に頼ることもできなくなります。福島の事故はそういう浪費社会への警告として起こったと理解することもできるでしょう。

さて、この信仰問答は、ただ盗まなければよいという消極的な教えではなく、そこから一歩踏み込んで、人に与えること、助けるという積極的な生き方へとわたしたちの思いを導きます。問111「汝、盗むなかれ」はそこまで考えなければならぬのです。先ほど「浪費」の問題を申しました。浪費は自分に与えられた賜物を自分だけのために無駄に使う。そこでは当然使い切れないほどの有り余るほどの賜物を与えられているのです。それが自分だけで留まり、他者に向かって行かない。だから恵みが無駄にこぼれて行く。そこにわたしたちの罪の現実があります。マザーテレサが、どうして世界に貧困がなくなるのかという問いに対して、それはあなたが与えていないから、と答えたのは有名な話です。それだけわたしたちは自分中心であり、自分の豊かさしか考えていないのです。その目が自分以外の他者や世界全体のことに向かっていない。そこに問題があるのです。そしてこれが神さまを見失った罪の人間の姿なのです。

けれどもイエス・キリストは、その罪を十字架であがない、復活によって、この罪に打ち勝つ新しい命をわたしたちに与えてくださいました。それは自分だけの豊かさや幸せを求める生き方ではなく、他者に向かう新しい視点をわたしたちに与えます。主御自身が自分を顧みることなくその命をわたしたちに与え尽くしてくださいました。主は惜しみなくその命をささげられたのです。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」(Ⅱコリント8:9)自分の利益だけを追求する生き方ではない。与えることですべてが豊かにされる。そのような本当の豊かさには生きる命を主は与えてくださいました。そこには、もう盗むのではなく、与えてもおお与え続けるわたしたちの新しい歩みが造られるのです。

「気前よく生きる」と題をつけました。本当の気前のよさとは何でしょう。人におごったり、プレゼントをすることでしよ

うか。そうではありません。神さまから与えられた恵み、賜物を惜しみなく与え続けること。愛を与えること。その源泉は神さまです。そしてそれは必然的に伝道へとわたしたちを駆り立てます。「人にしてもらいたいと思うことも何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイ7:12)わたしたちはもっと愛されたいのです。もっと大切にしてほしいのです。もっと自分の思いを分かちしてほしいのです。神さまはそうしてくださいました。だからわたしたちもそうできるのです。神さまの恵みを気前よく惜しみなく与え続けることができるのです。そのように今週も生きてまいりましょう。お祈りをいたします。